

富村（乃美氏知行地）地区の水田用水の枯渇問題が生じるのは当然の成り行きである。当時、新市・小野地は栗屋帯刀氏の領地であったことが余計に問題を深刻にしたのである。自然な流下状況からすれば久富地区に分があれども新市側は毛利家臣の高位寄組の栗屋氏である。関係農民の争いは遂に代官所まで上訴されたがこの件については

「何たる御裁許も御座なく」と結論を出していない。寛政5年（1793）突然、長年設置されて

いた新市宿駅は元の古市へ差返されることとなる。その経緯は不明である。約130年間の宿駅の終息は水利争議の終結でもあった。毛利家の家臣寄組栗屋氏4915石、一方同じく寄組乃美氏1155石、農民の熾烈な長期の水争いは両家の家格の相違を塗えながらの闘いでもあった。また、戦時下の昭和16年1月掛洲川上流の畑地区に於いて県営畑堰堤工事の着工をみたのであるが土盛堰堤の為に昭和19年9月並に20年9月の大風水害により決壊流域は甚大な被害を被ることとなる。然しその後砂防ダムとして築堤されたが異常干魃による農業用水の不足が深刻となり灌漑用ダムへの

切替え工事により現在の畑ダムの完成は昭和45年4月である。また、狩音ダムは平成6年3月完成。その他町内にある多数の灌漑用溜池の改修も逐次行なわれたのである。更に圃場整備の主なものとして、日置土地改良区222・5ha―昭和56年完了。向田地区35・7ha・昭和57年完了。南部土地改良区210ha―平成11年完了となっている。

藩制時代から日置の主要な農作物は米・麦である。特に米の増産は国策でもあり農民の生活そのものであってそれ故に圃場の開拓・整備が計られた。明治時代となって面積の拡張も緩和となつて来ている。明治40年水稻作付面積は1143町（蔵小田地区含）。大正8年1148町。昭和10年1047町。昭和29年蔵小田分離後は715町。平成15年の作付は367・9ha、転作266ha、休耕田3・15haとなつているのである。全国

的には水稻作付は明治末期から大正時代が最盛期であつてその後産業改革による鉱工業の展開と都市周辺の住宅供給等により水田は減少傾向となつていくのである。山陰の農村地帯はその影響は受けないものの近年の米減反政策は農家にとって未曾

有の打撃である。凡そ、農産物に限られたことではないが物は需要と供給のバランスによって成り立っている。今日のように農産物の貿易自由化と品目のグローバル化は零細農家にとってまことに厳しい。特に米は日本人の命綱であつたことを考え合せれば苦渋であり、自分の選択によつて自由に水稻が植付けられる時代の到来を希う。需要の面でも一人ひとりが食生活を見直し古来の米中心の食卓にすれば農業振興に結びつくものと思

う。本年1月8日付朝日新聞によれば文化庁は「日本の原風景ともいうべきもの」として、棚田や里山など農山村の景観を重視し文化財として保護することを提案している。またWTO交渉に配慮しつつ農水省は自然環境を保全することを念頭においている。最近、都市に暮らす人々の「癒やし」の場として農山村が重視されているが肝心の農家は圃場整備はされたものの米の生産が抑制される今日を深く憂うものである。

執筆

日置町郷土史研究会

会長 岡藤正作



▲ 千畳敷から見た小野地台ヶ原の耕地